

大 門 正 幸\*

OHKADO Masayuki \*



# 「過去生」の記憶を持つ成人～ジェニー・コッケル氏の事例

## An Adult Who Claims to Have “Past-Life” Memories

—The Case of Jenny Cockell

### 1. はじめに

筆者は、大門 (2011a) において、有力な「生まれ変わり型事例」(Case of the Reincarnation Type) であるとの観点から、Tucker (2008) が提案する事例強度尺度 (strength-of-case scale) を用いて、江戸時代に報告された勝五郎の事例を分析した。また大門 (2011b) において、現代の日本人児童の事例について分析を行い、イアン・スティーヴンソン (特に Stevenson (1974, 1975, 1977, 1980, 1983, 1997, 2000, 2003)) をはじめとする研究者が報告している「生まれ変わり型事例」の有力な例が現代の日本でも見られることを示した。「過去生の記憶」は通常思春期までに消失してしまうが、ごくまれに成人であっても記憶を保持している場合がある。

本稿では、成人でありながら複数の「過去生の記憶」を持ち、しかもその一つは前世の人格が判明している大変特異な、ジェニー・コッケル (Jenny Cockell) 氏の事例について報告する。事例の詳細についてはコッケル氏本人が4冊の著書 (Cockell (1993, 1994, 1996, 2008)) で述べている通りであるが、筆者は2011年9月6日にジェニー・コッケル氏に直接インタビューする機会を得、また関連資料を目にすることが出来たので、コッケル氏の著述では詳述されていない点にも触れながら報告を行いたい。

### 2. ジェニー・コッケル氏の事例

ジェニー・コッケル氏の事例が特異なのは、何と言っても、氏が成人であるにも関わらずかなり明瞭な「過去生」の記憶を保持している点である。しかもその記憶は複数にわたっており、その一つは「過去生」の人格が特定されている。以下、氏の著述 (主に Cockell (1993)) にしたがって、「過去生」の人格が明らかになったメアリ・サトン (Mary Sutton) の事例について、紹介しておこう。

1953年にイングランドで生まれたジェニーは、幼少の頃から繰り返し同じ夢を見ていた。夢の中ではジェニーはメアリという名の女性であった。白い壁の大きな部屋に横たわっていた。背の高い、窓枠のたくさんついた窓からはたくさんの光が差し込んでいた。そこは女性の家ではなかった。しばらくの闘病の後、いまや女性は死にかけていた。もはや肉体の痛みはほとんどなかった。呼吸が苦しく、息を吸うのにも努力が必要だったが、無理に吸おうとすると今度は発作を起こしてしまいそうだった。熱のため意識は濁り、時間の感覚もなくなっていた。

死にかけているメアリが恐れていたのは「死」そのものではなかった。自分の死によって子供達と決別せざるをえないということ、子供達の面倒を見ることができなくなってしまうこと。それをメアリは一番恐れていた。子供達との別

\*中部大学全学共通教育部 全学英語教育科

れが現実にならないよう、メアリは勝ち目の無い闘いに挑んでいた。

死が自分のおかれた厳しい境遇からの解放を意味するのは確かだが、同時に、子供達に対する責任を放棄せざるを得ないことに対する強い罪悪感を感じないわけにはいかなかった。

メアリの夢を見る度に、様々に交錯する複雑な感情の渦にジェニーは押しつぶされそうになった。

ジェニーがメアリのことを思い出すのは夢の中ばかりではなかった。目覚めている時の「記憶」には楽しいものも多かった。背が高く、兵士のように自信たっぷりの長男のこと、物静かで辛抱強い長女のことなど、全部で7～8人いたメアリの子供達のことをはっきりと覚えていた。また、自分の住んでいた小屋やその周りの様子なども覚えており、図1のような地図を、幼少の頃から何度も描いていた（ただし、図1は成人後に描いたもの）。

また、ジェニーは、メアリの生きていた時代がおおよそ1898年から1930年代の間であったこと、住んでいた場所がアイルランド(Ireland)であったことを記憶していた。アイルランドの地図を前に置いて自分が住んでいた場所につい

て考えると、心引かれる場所はいつもダブリン(Dublin)の北にあるマラハイド(Malahide)であった。

ジェニーが自分の持つ「過去生の記憶」について最初に話したのは4才の時であった。教会から帰ったジェニーは、母親に、教会では生死の話をするのに何故「過去生」の話はしないのかと尋ねた。この時、「生まれ変わり」は信仰に過ぎないとみなされていること、しかもイギリスでは一般には受け入れられていないということを知り、大きなショックを受けた。もっとも、母親はメアリとしての「過去生」の話をするジェニーを否定せず、上手に対応してくれた、そうコッケル氏は述懐している。

メアリの実在を確認したいという想いを抱き続けてきたコッケル氏であったが、学業、就職、結婚、二児の出産、育児と人生の重要な出来事が続き、その余裕はなかった。しかし、メアリが死亡した年齢(30才前半)に近づくにつれて、メアリが残した子供達に会いたいという思いが募りはじめた。今上での自分の二人の子供達は幸せなのに、メアリとしての自分が残した子供達には幸せな思いをさせてやれなかったという罪の意識が、ジェニーを「何か行動を起こさねば」という気持ちにさせた。

1980年、居住地の近くにトウチェスター書店(Towcester Bookstore)という新しい店ができた時、コッケル氏はマラハイドの地図を注文した。地図が届いたとの連絡があった時、コッケル氏は記憶で描いた地図(図1)を持参し、書店に足を運んだ。駅の位置、道の曲がり具合等、自分の描いた地図が実際の地図と一致して

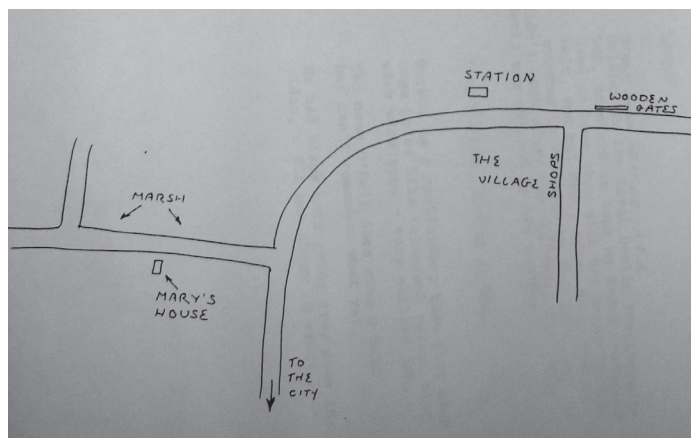


図1：メアリの住んでいた家の付近の地図

いることを知り、コッケル氏は、自分の記憶が単なる想像の産物ではないことを確信した。なお、コッケル氏の描いた地図が実際の地図と一致していた点については、書店のオーナーであったピーター・グッディング (Peter Gooding) 氏も確認している。この点については、筆者も電話および電子メールでグッディング氏にインタビューし、事実であることを確認した。

その後の調査の詳細についてはコッケル氏の著書に譲るが、最終的にコッケル氏はメアリの死亡証明書および結婚証明書を入手し、メアリが実在していたことをつきとめた。調査のためにマラハイドに足を運んだ時には、コッケル氏は、メアリの住んでいた小屋の場所（小屋自体は既に壊されていた）や馴染みの肉屋、波止場などを特定している。また、コッケル氏が記憶していたようにメアリには多くの子供達（8人）がいたことが明らかになり、長男であるソニーの居場所を見つけることにも成功した。長男のソニーと接触するにあたって、コッケル氏は、超常現象を扱うテレビ番組の調査員であるギティ・コーツ氏に仲立ちを依頼した。コーツ氏は、コッケル氏の話の信憑性を確かめるために、二人が実際に対面する前にそれぞれに個別のインタビューを行い、二人の発言を照らし合わせる作業を行っている。照合の結果、両者の発言は細部に至るまで一致していた。その後、コッケル氏はソニーと対面し、互いの記憶を確認し合い、また時には片方がもう片方の記憶を補う形で会話が進んだ。コッ

ケル氏の記憶のあまりの正確さに、ついにソニーはコッケル氏を自分の母親の生まれ変わりであると認め、2000年に死亡するまで、コッケル氏と交流を続けた。ソニーの仲立ちで、コッケル氏は他の何人かの子供との「再会」も果たしている。

コッケル氏のご好意により、ギティ・コーツ氏によるインタビュー記録を入手することが出来たので、コッケル氏とソニー両者の話が一致している部分について挙げておこう。

表1から二人の証言にかなりの一致が見られることが分かるが、二人が実際に対話し記憶を確認し合うことによって、さらに多くのことが明らかになった。たとえば、コッケル氏は、寒空の中、マラハイドの波止場で誰かを待ち続けていたことを記憶していたが、誰を待ち続けていたのかは分からなかった。その話を聞いたソニーは、自分が近くの島でゴルフのキャディーのアルバイトをしており、母親であるメアリが波止場で自分の帰りを待っていてくれたことを思い出した。また、コッケル氏は、ソニーが



図2 コッケル氏とソニー

11 才ぐらいの時、仕掛けた罌を見に行ったことを詳しく覚えていた。家事で濡れた手を拭きながら子供達の後を追いかけたメアリは、罌のかかった野うさぎが意外なことにまだ生きているのを見た。単独のインタビューでは、子供の頃、野うさぎを捕まえていたとしか語っていなかったソニーだが、コッケル氏の話聞き、罌を使って野うさぎを掴まえた時のことを鮮明に思い出した。

このような「記憶の確認」を通して、ソニーはコッケル氏を自分の母親の生まれ変わりに違いないと確信するに至ったのである。

コッケル氏にとって自分の「過去生」の記憶の正しさが証明されたのは重要なことではあったが、氏にとってより大きな意味を持ったのは、自分が充分世話をすることができなかった子供達の動向が分かり、親としての責任を果たせなかったことに対する罪の意識が軽減されたことであった。

### 3. 「過去生」の記憶の強さ尺度によるジェニー・コッケル氏の事例の分析

イアン・ステイーヴンソンの弟子であるジ

ム・タッカーは、子供が語る「過去生」の記憶の強さを測る尺度、事例強度尺度 (strength-of-case scale, SOCS) を提案している。この尺度は、イアン・ステイーヴンソンが収集した 2,500 を越える調査事例のうち、Tucker (2000) の執筆時点でコンピューター入力完了していた 799 の事例の分析によって作成された尺度である。この SOCS は 22 の項目を含み、それらは大きく「母斑・先天性欠損」「前世に関する言及」「ふるまい」「死亡人物との関連」の 4 つの範疇に分けられている。この尺度に従って、ジェニー・コッケル氏の事例を分析した結果が表 2 である。ここではこの SOCS に従ってジェニー・コッケル氏の事例を分析し、現在の分析尺度においてコッケル氏の事例がどの程度強力なものと判定されるかを見てみよう。

なお、「得点」については、斜線の右側にそれぞれの項目に与えられた配点を、左側にコッケル氏の事例に関する得点を記してある。たとえば、コッケル氏の事例では母斑や先天性欠損(項目 1～項目 3) は報告されていないので、数値はいずれも「0/0」となっている。項目 5「過去生における場所や人々について語り、それら

表 1：コッケル氏とソニーの話の一致点

|                |                                                                                                                                                                                                          |
|----------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 小屋について         | 1 階建て、石造りの古風な家。通りの左側の最初の家。入り口は道沿いではなく、家の横。庭はなかったが、家畜が草を食んでいた。裏には小さな土地があり、野菜を育てていた。小屋の前には農地があり、土地の低い部分は沼地になっていた。小屋にはまっすぐ入ることが出来ず、左か右に曲がる必要があった。小屋の窓は小さかった。小屋の持ち主は Mac(ソニーはマックマホンと言っている)。制服姿の兵士の写真が飾ってあった。 |
| メアリについて        | 長い黒髪。子供達の前では縛っていた。黒目のブラウス、長いスカート。                                                                                                                                                                        |
| 夫(父親)について      | 戦争(第一次世界大戦)に行っていた。子供の面倒を見るようなタイプではない。材木を扱い技術のいる仕事(ソニーによれば足場職人)。                                                                                                                                          |
| 子供達(兄弟・姉妹)について | 5～8 人の子供(正確には 8 人)。それ以外に死産の子供がいた。野うさぎを捕まえた。小さい黒い犬を飼っていた。                                                                                                                                                 |
| 外出について         | 教会と一緒に出かけた。                                                                                                                                                                                              |
| 家事について         | 買い物をよくした。                                                                                                                                                                                                |

が過去生人格の死亡後変化している」については、居住していたマラハイドの小屋が取り壊されてしまっていたこと、ソニーの帰りを待っていた波止場が木製からコンクリート製になっていたこと、馴染みの肉やの窓が変わっていたことに気付いた点を挙げるができる。また、項目6に関する事項は、多岐に渡る(20を越える)ため8点が与えられている。項目11「過去生と関係する、異常な好み」については、アイルランドの伝統音楽に異常なこだわりを示していたことが挙げられる。項目13「過去生と関係する、異常な恐怖症」としては、幼少の頃から子供を残して死ななければならないという強い恐怖感を感じていたことが挙げられる。項目19「本人の生誕地と死亡人格の主な居住地」との距離、すなわちノーサンプトンシャーとマラハイドの距離は、GoogleMapによれば283マイル(約455キロメートル)であり、25キロメートルをはるかに越えるため5点が与えられている。コッケル氏とメアリの社会的地位や経済的

地位の差の判断は難しいが、職業を持たず、肉を買うことも困難であったメアリとの相違を考慮し、項目20、項目21については「中程度」とした。得点の合計は39である。

SOCSによって799例を分析したTucker(2000)は、最高値、最低値、平均値はそれぞれ49、-3、10.4であると報告しており、今回の事例の得点39はかなり高く、SOCSの観点からもコッケル氏の事例は非常に有力な「生まれ変わり」を示唆する事例であると言えることが出来るであろう。

## 5. まとめ

本稿ではジェニー・コッケル氏を持つ複数の「過去生」の記憶のうち、前世の人格が特定されたメアリ・サトンの事例について紹介した。既に述べたように、コッケル氏の持つ「過去生」の記憶は複数に上るが、そのうちの一つは江戸時代の武士の娘としての記憶である。この記憶にはついては、スリランカ在住の日本人、船越

表2：SOCSによるコッケル氏の事例の分析

| 項目                                        | 得点   |
|-------------------------------------------|------|
| 母斑・先天性欠損                                  |      |
| 1. 死亡人物の致命傷と一致                            |      |
| 医療記録による実証                                 | 0/8  |
| 死亡人物の友人または親族により実証                         | 0/5  |
| 本人による主張のみ                                 | 0/2  |
| 2. 死亡人物の致命的ではない傷と一致                       |      |
| 医療記録による実証                                 | 0/5  |
| 死亡人物の友人または親族により実証                         | 0/3  |
| 本人による主張のみ                                 | 0/1  |
| 3. 死亡人物の病気との一致                            |      |
| 医療記録による実証                                 | 0/4  |
| 死亡人物の友人または親族により実証                         | 0/2  |
| 本人による主張のみ                                 | 0/1  |
| 過去世に関する言及                                 |      |
| 4. 本人が過去世を記憶していると主張しているか                  |      |
| している                                      | 0/0  |
| しておらず、他の証拠にのみ基づいている                       | 0/-2 |
| 5. 過去生における場所や人々について語り、それらが過去生人格の死亡後変化している | 5/5  |

|                                     |      |
|-------------------------------------|------|
| 6. 過去生に関する発言で実証されたものから誤りであったものを引いた数 |      |
| >20                                 | 8/8  |
| 11-20                               | 0/5  |
| 6-10                                | 0/3  |
| 1-5                                 | 0/1  |
| 0                                   | 0/0  |
| -1(-5)                              | 0/-2 |
| -6(-10)                             | 0/-5 |
| <-10                                | 0/-8 |
| ふるまい                                |      |
| 7. 過去生と関係する、異常な食事上の好み・嫌悪            | 0/3  |
| 8. 過去生と関係する、異常な食事作法                 | 0/3  |
| 9. 過去生と関係する、異常な嗜好品の好み               | 0/3  |
| 10. 過去生と関係する、異常な好み                  | 3/3  |
| 11. 過去生と関係する、異常な技術や才能               | 0/3  |
| 12. 過去生と関係する、異常な敵意                  | 0/3  |
| 13. 過去生と関係する、異常な恐怖症                 | 3/3  |
| 14. 異なる性と関係する行動（過去生の人格と性別が異なる場合）    |      |
| 友人または血縁者による報告                       | 0/3  |
| 本人と研究者のみによる報告                       | 0/3  |
| 15. 過去生の家族または住居に戻りたい、または戻りたくないという欲求 |      |
| 戻りたいという強い欲求                         | 3/3  |
| 戻りたいという弱い欲求                         | 0/1  |
| 中立的                                 | 0/0  |
| 戻りたくないという弱い欲求                       | 0/1  |
| 戻りたくないという強い欲求                       | 0/3  |
| 16. 遊びを通して表される、過去生での記憶              | 0/3  |
| 死亡人物との関係                            |      |
| 17. 死亡人物の特定                         |      |
| 学術的な素養のある調査者による                     | 0/3  |
| それ以外の調査者による                         | 3/3  |
| 家族または友人による                          | 0/1  |
| 18. 事例が明らかになるまでの二つの家族の関係            |      |
| 緊密な関係、あるいは同一家族内                     | 0/-2 |
| わずかな関係                              | 0/-1 |
| お互いに知ってはいたが無関係                      | 0/0  |
| お互いに全く知らなかった                        | 5/5  |
| 19. 本人の生誕地と死亡人格の主な居住地 (km)          |      |
| 0.0-1.5                             | 0/0  |
| 1.6-24.9                            | 0/2  |
| 25.0 以上                             | 5/5  |
| 20. 本人と死亡人物との社会的地位の相違               |      |
| わずか                                 | 0/1  |
| 中程度                                 | 2/2  |
| 大きい                                 | 0/3  |
| 21. 本人と死亡人物との経済的地位の相違               |      |
| わずか                                 | 0/1  |
| 中程度                                 | 2/2  |
| 大きい                                 | 0/3  |
| 22. (カースト制に関するもののため割愛)              |      |
| 合計点                                 | 39   |

久代氏によって詳細な調査がなされているが(Cockell (2008) 参照)、残念ながら、まだ「過去生」の人格の特定には至っていない。この事例については、船越と共同で調査中であるので、いずれ報告を行いたいと考えている。

#### 謝辞

本稿の執筆に際しては、インタビューに応じ貴重な資料の撮影を許可して下さったコッケル氏に深く感謝申し上げます。図1、図2は氏の許可を得て掲載しています。また、電話およびメールでのインタビューに応じてくださったピーター・グッディング氏、コッケル氏の事例について貴重な情報を提供して下さった船越久代氏にもお礼申し上げます。

#### 参考文献

- 大門正幸 (2011a) 「『生まれ変わり』事例としての『勝五郎再生記聞』」『貿易風』6, 233-239.
- 大門正幸 (2011b) 「『過去生の記憶』を持つ子供について～日本人児童の事例～」『人体科学』20, 33-42.
- Cockell, Jenny (1993) *Yesterday's Children: The Extraordinary Search for my Past Life Family*. London: Piatkus.
- Cockell, Jenny (1994) *Across Time and Death: A Mother's Search for Her Past Life Children*. London: Piatkus.
- Cockell, Jenny (1996) *Past Lives, Future Lives: One Woman's Extraordinary Experiences of Other Lifetimes*. London: Piatkus.
- Cockell, Jenny (2008) *Journeys Through Time: Uncovering My Past Lives*. London: Piatkus, 2008
- Stevenson, Ian (1974) *Twenty Cases Suggestive of Reincarnation* (2nd revised edition).

- Charlottesville: University Press of Virginia.
- Stevenson, Ian (1975) *Cases of the Reincarnation Type, Vol. I: Ten Cases in India*. Charlottesville: University Press of Virginia.
- Stevenson, Ian (1977) *Cases of the Reincarnation Type, Vol. II: Ten Cases in Sri Lanka*. Charlottesville: University Press of Virginia.
- Stevenson, Ian (1980) *Cases of the Reincarnation Type, Vol. III: Twelve Cases in Lebanon and Turkey*. Charlottesville: University Press of Virginia.
- Stevenson, Ian (1983) *Cases of the Reincarnation Type, Vol. IV: Twelve Cases in Thailand and Burma*. Charlottesville: University Press of Virginia.
- Stevenson, Ian (1997) *Reincarnation and Biology: A Contribution to the Etiology of Birthmarks and Birth Defects* (2 vols.). Westport, CT: Praeger.
- Stevenson, Ian (2000) *Children Who Remember Previous Lives: A Question of Reincarnation* (revised edition). Jefferson, NC: McFarland.
- Stevenson, Ian (2003) *European Cases of the Reincarnation Type*. Jefferson, NC: McFarland.
- Tucker, Jim (2000) "A scale to Measure the Strength of Children's Claims of Previous Lives: Methodology and Initial Findings," *Journal of Scientific Exploration* 14, 571-581.